



埼玉県・私立
はな さき とく ほる
花咲徳栄高校

アクティブラーニング

生徒の活動中心の授業に 全校を挙げて切り替え 自ら学ぶ姿勢を育てる

◎「人間是宝」を建学の精神、「今日学べ」を校訓とする。2013年に全校でアクティブラーニングを導入。14年、文部科学省事業「スーパー食育スクール」指定。ボクシング部、競泳部、空手道部、野球部など、全国大会で活躍する部が多い。

設立

1982(昭和57)年

形態

全日制/普通科・食育実践科/共学

生徒数

約1870人

2014年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、茨城大、宇都宮大、埼玉大、国際教養大、高崎経済大、埼玉県立大、横浜市立大などに21人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ776人が合格。

住所

〒347-8502
埼玉県加須市花崎江橋519

電話

0480-65-7181

Web Site

<http://www.hanasakitokuharu-h.info/>

変革のステップ

背景

◎講義形式の一斉授業や学習量を重視する指導で生徒の学力を伸ばすことに、多くの教師が限界を感じていた

STEP 1

実践

◎主体的に学ぶ力を身に付ける教育であるアクティブラーニングの全校での導入を決定。年4回の研究授業などで教師個々の指導力向上を図る

STEP 2

成果

◎授業や学校行事に主体的に参画する生徒が増加。教師集団の一体感や、切磋琢磨して互いを高め合う意識が醸成される

STEP 3

アクティブラーニングを導入し 自ら考え、行動できる生徒を育てる

埼玉県加須市にある私立花咲徳栄高校は、生徒数約1870人、教員数約140人の大規模校だ。同校が全校を挙げてアクティブラーニングを授業に取り入れ始めたのは、2013年度のこと。多くの県立高校で学校改革を主導してきた小林清木校長が赴任し、授業改革を提案したのがきっかけだった。

「本校には、初代理事長の佐藤栄太郎先生が掲げた『今日学べ』という校訓があります。過去の成功例は、必ずしも未来を保証するものではありません。未来に向けて何をすべきか考え、今できることに最善を尽くすのが大切です。そのために何よりも必要なのは、自立した生徒を育てること。自己管理ができ、自ら考え、決断・行動できる力を育むために、従来の一斉授業を改め、生徒が受け身となりやすい授業形態からの脱却を図ることから始めようと考えました」(小林校長)

教師も従来の授業に限界を感じていた。教務科長補佐の杉嶋徹先生はこう述べる。

「本校では、これまで0時限、7・8・9時限授業を設け、学習量を重視する指導を行ってききました。それにより、一定の進学実績も上げてきましたが、必ずしも量に見合うだけの学力が生徒に身に付いているとは言えない

状況でした。量重視から質重視への転換を図り、生徒が主体的・能動的に取り組む姿勢を育むことが必要だと感じていました」



小林清木 こばやし きよき
花咲徳栄高校校長
教職歴40年。同校に赴任して2年目。「今日学べ」未来を想像し、今やるべきことをやる」



北野耕司 きたの こうじ
花咲徳栄高校
教職歴31年。同校に赴任して32年目。進学指導科長補佐。「日々新しい発見のある授業を目指す」



柏嶋徹 まつしま とおる
花咲徳栄高校
教職歴27年。同校に赴任して26年目。教務科長補佐。「分かるまで。出来るまで」生徒に積極的に関わり、育てていきたい」



齊藤久士 さいと う・ひさし
花咲徳栄高校
教職歴13年。同校に赴任して14年目。アクティブラーニング推進委員長。「生徒一人ひとりの内在する可能性を拓き、生徒と共に成長し続けたい」



星加奈 ほし・かな
花咲徳栄高校
教職歴13年。同校に赴任して1年目。アクティブラーニング推進委員。「常に夢や希望を語り合える存在でありたい」



天宮さやか あまみや・さやか
花咲徳栄高校
教職歴7年。同校に赴任して8年目。アクティブラーニング推進委員。「生徒一人ひとりと向き合い、夢に向かって前進する後押しをしたい」

研究授業・公開授業で 教師が認め合う風土を醸成

13年6月、アクティブラーニングの専門家を招き、教師全員で研修を受けるところから改革は始まった。13年度は研修を4回実施。アクティブラーニングの目的や方法の説明を受けた上で、教師が生徒役・教師役となる研究授業、授業後の振り返りや意見交換などを行った。14年度は10月までに研修を3回行い、各教科が2回ずつ研究授業を実施。学年や教科の橋渡し、研修の企画・運営は、各教科から1人ずつ選ばれたアクティブラーニング推進委員が担当する。

多くの教師が得るものが大きかったと言うのが、研究授業後の振り返りだ。授業者が授業を振り返って狙いや手応えを語り、参観者は授業の良い点、参考にした点などを伝える。英語科の星加奈先生はこう話す。

「互いに認め合い、良い点を学び合うのが、研修の狙いです。授業でうまくいかなかったところは自分が一番よく分かるので、他の先生に質問して意見を聞き、次の授業に生かすことも出来ます。回を重ねるごとに、先生方が互いに高め合おうとする雰囲気になります。なっていくのを感じます」

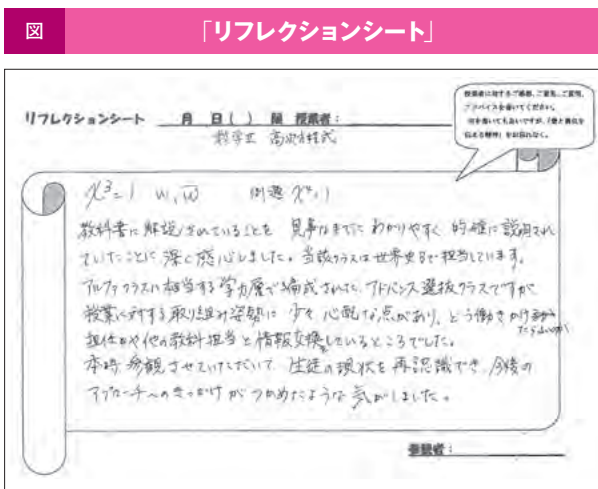
14年度は2週間の公開授業も行った。公開1週間前に、授業の公開日時を各教科一覧にして提示。どの教師も最低1回は公開したが、熱心

な教師は4、5回公開したという。一方、授業の参観は1人最低2回とし、参観後は必ず「リフレクションシート」(図)を記入・提出し、後日、その内容を授業者にフィードバックした。

授業改革の根底にある 教師一人ひとりの課題意識

同校で一斉に授業改革が進んだのは、既に教師の間に、活動中心の授業にしたいという思いが生まれつつあったからだ。アクティブラーニング推進委員長の齊藤久士先生は、数年前から自分の授業を変えようと思っていたのは、『VIEW W

「授業を変えよう」と思ったのは、『VIEW W



「リフレクションシート」には、参加者全員がヒントを得られるよう、授業の良い点やまねきたい点を書くのがルール。
*学校資料をそのまま掲載

21」で読んだ記事がきっかけでした。知識の定着率は、自ら体験すると7割以上、他人に教えると9割以上となり、講義や読書から得る知識よりも、定着率は高いとありました。それに触発され、私は知識伝達型の一斉授業から活動主体の授業にしようと、テキストや発問に工夫を重ねました」

国語科担当の天宮さやか先生も、従来の講義形式の授業に限界を感じていた。生徒は静かに授業を聞いているが、定期考査や模試の成績はなかなか伸びなかった。そんな時、外部研修でアクティブラーニングの手法を知り、古文の授業でグループ活動を行ってみた。すると、古文の苦手な生徒が積極的に話し合う姿が見られ、授業後のアンケートでは、「古文が分かるようになった」と答える生徒が増えたのだ。

そのように、アクティブラーニングの良さを実感している中堅・若手の教師が推進委員として学年や教科の橋渡しになったことで、改革の実効性が高まったと同校は考える。

なぜ学ぶのかを 生徒自身に気付かせる

アクティブラーニングはグループ活動が中心だ。席の近い4〜6人でグループとなる場合が多いが、その科目が得意な生徒、苦手な生徒がバランスよくグループに入るように配慮するこ

ともある。いずれにせよ、メンバーが固定しないようにするのがポイントだ。

「毎回同じ顔ぶれですと、同じようなポイントで行き詰まってしまうがちです。他のグループは違う調べ方をしていたり、別の情報を持っていたりすることもあります。生徒が新たな発見を得られるよう、定期的にメンバーを変えています」（天宮先生）

授業の基本的な流れは、最初に前提となる知識や理論、考え方を説明した後、グループで課題に取り組み、最後にグループ間の意見交換や定着を図る確認テストなどを行う。もちろん、単元や時期、学年によって、教師の説明と生徒のグループ活動のバランスは変わる。世界史の授業の場合、1・2年生ではグループ活動が中心だが、3年生では大学入試を見据え、教師がまず出題のポイントを解説し、各自が演習問題を解くというプロセスを経た上で、グループで意見を出し合いながら問題の最終的な答えを考えるといったスタイルで行うこともある。

「問題演習型の授業でも、アクティブラーニングは有効です。分からない相手に教えるために、教える側は内容をより深く理解しようとしています。教える相手だけでなく、自分の理解も深まるのです。そのため、1人で取り組むよりも、学習内容の定着度が高まります」（松嶋先生）

古文では、苦手意識を持つ生徒が多いため、

単に文章の内容を理解させるだけでなく、作品の背景知識にも着目させる。例えば、『源氏物語』の物語全体をグループで調べさせると、堅苦しいイメージと違って意外に面白い内容だと分かり、授業に向かう気持ちも変わる。文法事項も、なぜその人物が主語なのか、なぜその語が助動詞と識別できるのかなどをグループで考えさせると、生徒は意欲的に取り組むという。

「これまでなら教師が教えていた部分を、生徒自身になぜそうなるのかを考えさせています。生徒が自ら気付けば、内容をより深く理解でき、定着率も高まります。更に、なぜ文学史や文法を学ぶのかという認識にもつながっていくのです」（天宮先生）

学習歴の違う生徒が協力し合うことが 学びのレベルを高くする

英語科担当の星先生は、生徒の学習歴の違いが、グループ活動では利点になると指摘する。

「1年生では中学校で培った英語力にかなりの違いがあります。英文を読む時に、知っている単語をつなげて理解しようとする生徒がいる一方、文章の構造から理解しようとする生徒もいます。そうした学力や学習歴の違いのある生徒たちを1グループにすると、互いの弱点を補いながら、答えを導き出そうとします。協力し合うことで実力以上の力を発

揮できることを、生徒たちは学ぶのです」
アクティブラーニングを取り入れると、授業進度が遅れるのではないかと指摘もあるが、その点について、進学指導科長補佐の北野耕司先生はこう説明する。

「本校でも、導入前に授業進度の遅れを懸念する声がありました。解決策の1つとして、例えば、理科では教科書の進度に合わせて、その時間に学ぶ内容をまとめたプリントをグループで取り組ませています。以前は教師が全ての内容を説明していましたが、アクティブラーニングでは、教師は生徒たちだけでは答えを導き出せなかった部分やプラスアルファの部分に絞って説明すればよいので、進度が遅れることはありません」

世界史担当の齊藤先生も教材を工夫し、進度を確保している。

「板書と同じ内容のプリントを作り、テキストとして活用しています。私は板書の時間が、生徒は板書をノートに書き写す時間が省きました。それによって、グループ活動の時間を捻出するだけでなく、生徒が教師の説明を集中して聞くようになりました」

「アクティブラーニング通信」で ノウハウの共有を更に図る

アクティブラーニングを導入して1年半が経

ち、活発に自分の意見を述べる生徒、主体的にグループ活動に参加する生徒が目に見えて増えた。その意識は課外活動にも波及し、文化祭などの行事でも、生徒同士が意見を述べ合って活動に取り組む姿が見られるという。

試験への姿勢も変わった。以前は定期考査で少し複雑な記述問題が出ると、無解答が多かったが、今ではほとんどの生徒が解答欄を埋めようと努力する。間違いを恐れず、自分の考えを言葉にしようとする生徒が増えているのだ。

教師の意識もより前向きになった。研修を重ねるに連れて自信を付け、公開授業の担当に積極的になる教師が増えた。また、職員室では、授業の方法について語り合う教師の姿が

日常的に見られるようになった。今後は、「リフレクションシート」や新しい取り組みを行う教師の声などを掲載する「アクティブラーニング通信」を定期的に作成・発行し、教師間のコミュニケーションの深化と、学年や教科を超えたノウハウの共有を進めていく考えだ。

「教師全員がスキルやノウハウを共有すれば、1人の教師の経験が皆の経験になります。1人の教師が140人分の力を得ることになるので。皆で支え合い、出る杭を伸ばしながら、いずれは日本一の教師集団を育成していきたい。それは、日本一の生徒を育てるといこと。生徒・教師共に『日本一』を目指して改革を進めていきます」（小林校長）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

授業改革のヒントを得ると共に 他校の先生から勇気をもらおう

3学年担任 天宮さやか

教師になってからしばらくは、授業は生徒が静かに前を向いて教師の話聞くものという意識で取り組んできました。ところが、私の話をしっかり聞き、ノートもきちんと取っているのに、試験の結果が思わしくない生徒が少なからずいました。プリントを用意したり、課題や小テストを工夫したりしても成果はなかなか上がらず、もどかしい思いで授業を行っていました。

そうした折、先輩の先生に誘われてアクティブラーニングの研修を受けたのです。「生徒が静かに教師の話聞くだけが授業ではない。こうした方法もあるんだ」と、ぱっと目の前が開けました。早速、授業で試したところ、生徒の意欲は目に見えて高まり、「これだ」と確信しました。そうした経緯から、学校全体で授業改革が始まった時、私は国語科のアクティブラーニング推進委員に選ばれました。最初は公開授業の日程を調整するのも大変で、1、2人しか手を挙げない教科もありましたが、回を重ねるごとに積極的に授業を公開する先生が増えていったのはうれしかったです。

委員として外部研修によく参加するようになり、大きな刺激を受けています。また、他校の先生と互いに悩みを共有することで、どの先生もそれぞれの学校で課題を持ち、その解決のために試行錯誤されていることを知り、とても勇気付けられました。今後は委員として、外部の情報を校内の授業改革に反映していくことにも力を入れていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年12月号指導変革の軌跡「岡山県立邑久高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け